

松尾 潔さんに聞く



まつお きよし
1968年、福岡市生まれ
音楽プロデューサー／作家
少年時代から米黑人音楽に心酔し、早稲田大学在学中にR&Bやヒップホップなどを取材対象として音楽ライター活動を始める。90年代半ばから音楽制作に携わりSPEED、MISIA、宇多田ヒカルのデビューにプレーンとして参加
その後、プロデューサー、ソングライターとして平井堅、CHEMISTRY、東方神起、JUJUなどを手がける。提供した楽曲の累計セールスは3000万枚を超す
EXILE「Ti Amo」(作詞・作曲)で日本レコード大賞
天童よしみ「帰郷」で日本作詞大賞を受賞
著書に『松尾潔のメロウな日々』、『松尾潔のメロウな季節』
『永遠の仮眠』、『おれの歌を止めるな ジャニーズ問題とエンターテインメントの未来』、『松尾潔のメロウなライナーノーツ』など

音楽と政治・社会に
接続の意識を

「人権侵害」を見て見ぬふりはできない

●音楽プロデューサーという仕事

菅間 本誌巻頭インタビューで音楽関係の方にお話を伺うのは、ソウル・フラワー・ユニオンの中川敬さん(二〇一五年八六号)、加藤登紀子さん(二〇二二年一一五号)に続いてお三方目になります。いずれも音楽と社会・政治の境界線を超える／ほかす活動を長年されておられますが、松尾さんも、音楽プロデューサーという肩書きに収まらない、広範囲・多岐にわたる社会的活動をされています。

まずお伺いしたいのは、プロデューサー業についてです。とりわけ音楽プロデューサーというと、ビートルズにジョージ・マーティン、マイケル・ジャクソンにクインシー・ジョーンズなどが思い浮かびます。クインシーには、松尾さんはインタビュースされているんですね。

『週刊文春』連載の阿川佐和子さんのインタビュー「この人に会いたい」(二〇二四年五月二三日号)でも、阿川さんは僕と同じように「音楽プロデューサーって具体的に何をするんですか?」と冒頭で松尾さんに質問していますが、あまり深掘りはされておらず、流れてし

まったような感じなので、まずはこの問いから入りたいと思います。

松尾 確かに、阿川さんの時も最初の質問はそうでしたね。一口にプロデューサーと言っても本当に色々で、僕がお話できるのは、あくまで音楽プロデューサーの話です。この類の質問を受けることはよくあって、どう答えたらいいのかと試行錯誤を重ねてきていますが、現時点でこれが例えになるのではないか、という仕事が一時的にランの総料理長なんです。〃総〃がついてもつかなくていいんですけど、料理長の場合、小さなお店だったら全で一人でこなすこともあるでしょう。音楽プロデューサーだってローバジェット(低予算)の時はそういうこともあります。

僕はメジャーなお仕事が多いので、さすがに一人でやるということはないですが、それはともかくなぜ料理長なのか。こういう料理を作りたいというゴールがあって、そのために食材、職人をどう配置するか、プロセスをどうするかを考える。場合によっては、就任したタイミングでキッチンのあり方を変えてみたりする。それって、スタジオの機材を変えることと似ています。その工程が複雑だろうとシンプルだろうと一貫してあるのは最

聞き手
菅間正道(自由の森学園高校・校長)